

『野球殿堂 2012』を刊行しました！

事務局長 廣瀬 信一

表紙の色、デザインも変え装いも新たに3年振りに『野球殿堂 2012』を刊行致しました。前回の『野球殿堂 1959-2009』との相違等を交え、ご紹介させていただきます。

まずは、2010(平成22)年から2012(平成24)年までに殿堂入りされた9氏(東尾 修氏、江藤 慎一氏、古田 昌幸氏、落合 博満氏、皆川 陸雄氏、北別府 学氏、津田 恒実氏、長船 駿郎氏、大本 修氏)の略歴を追加しました。これにより、掲載人数は総勢177名となりました。また、当然ながら各種データも最新なものに更新し、プロ野球監督の2009(平成21)年以降の成績も追加しました。「表彰規程の変遷」についても、内容をより分かり易い表現に変更しました。アメリカ野球殿堂のコラム欄では、2011(平成23)年から殿堂入り選出方法の変更に伴い、ベテランズ委員会の新ルールを紹介しております。

今回、大きく変わった点は、巻末に「野球史略年表」を新たに追加したことです。

日本だけではなく、アメリカ野球の歴史も併記してありますので、日米野球全体の流れが一覧できます。この年表と殿堂入りされた177名の功績をご覧いただくと、明治時代から現代まで、野球史のエポックメイキングとなる場面では、必ずといっていいほど殿堂入りされた方々が関わっていることがわかります。

野球殿堂は、日本の野球の発展に大きな貢献をした方々の功績を永久に讃え、顕彰するために1959(昭和34)年に創設されました。2012(平成24)年までに殿堂入りされた177名の中には、プロ野球、アマチュア野球で活躍された選手だけではなく、野球に携わる様々な仕事をされていた方たちも数多く選出されています。『野球殿堂 2012』は、「人物からみる日本の野球史」となる1冊です。



『野球殿堂 2012』

目次

- 野球殿堂とは
- 野球殿堂入りした人たち 1959-2012
- 野球殿堂レリーフ
- 表彰委員会規程・表彰規程の変遷
- 鎮魂の碑
- 戦没野球人
- 野球史略年表



野球体育博物館 トピックス (2012年2月～2012年4月編)

【3月10日】IBAFフラッカーリ会長が来館！

東京ドームで開催の東日本大震災復興支援ベースボールマッチ観戦のため来日した、国際野球連盟 (IBAF = International Baseball Federation) のリカルド・フラッカーリ会長が当博物館に来館しました。

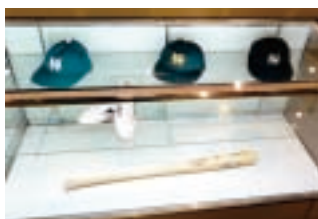


野球殿堂を見学するフラッカーリ会長 (右)、IBAF 田和副会長 (中)、当館廣瀬館長 (左)

【展覧会情報】王貞治ベースボールミュージアム 「ホークス栄光の歴史展」

★会期：3月1日～6月17日

★会場：王貞治ベースボールミュージアム (福岡ヤフードーム内)



南海、ダイエー、ソフトバンクと続くホークスの歴史を紹介する特別展。当館からは、杉浦 忠投手着用南海ユニホーム、門田 博光選手着用南海ユニホーム・バット、松中 信彦選手着用ダイエーユニホーム、若田部 健一投手使用グラブ、佐々木 誠選手使用スパイク等 14点を出品しています。

【3月30、31日】シーズン開幕記念 久保田名人のバット製作実演開催！

2012年の野球シーズン開幕を記念して、ミズノテクニクス株式会社の久保田 五十一 (くぼた・いそかず) 氏によるバット製作実演を開催しました。開幕イベントとしては今回で3度目の開催で、実演に加え、「バット」や「仕事」にまつわる様々なお話をさせていただきました。



【展覧会情報】甲子園歴史館 「1992年の虎戦士たち・平成のサヨナラゲーム特集」

★会期：4月6日～7月22日

★会場：甲子園歴史館 (阪神甲子園球場内)



タイガースが優勝まであと一步と迫った1992年シーズンの印象的な試合を写真や展示品で振り返る企画展と、サヨナラゲーム特集として、平成に入ってからサヨナラ勝ちゲームを映像などで紹介する企画展を同時開催。当館からは、和田 豊選手着用ユニホーム・バット、湯舟 敏郎投手使用グラブ、野田 浩司投手使用グラブ、亀山 努選手使用バット、新庄 剛志選手使用バット、1992年カルビー野球カード等 18点を出品しています。

2012年度の維持会員を募集中！

財団法人野球体育博物館は、1959 (昭和34) 年に野球専門の博物館として開館して以来、野球や体育に関する資料を収集・保管・公開してきました。バット等の実物・写真資料は約3万点、図書・雑誌は約5万冊を収蔵しており、展示や閲覧という形で多くの方々に利用していただいております。

また、年1回競技者表彰委員会と特別表彰委員会にて野球界の功労者を選出し、「野球殿堂入り」として表彰しています。維持会員とは、このような博物館の事業にご賛同いただいた方々に、維持会費をお願いし、博物館の運営をご支援いただくものです。

① 会員特典

- (1) 当博物館発行「ニュースレター」(季刊)を送付します。
- (2) 無料で博物館に入館できる優待証を発行します。
- (3) アメリカの野球博物館 (クーパースタウンにある) にも無料で入館できます。
- (4) 会員以外の方でも利用できる博物館招待券を差し上げます。
- (5) イベント情報などを優先的にご案内します。
- (6) 博物館で販売している商品が10%引きになります。

*新個人会員には上記の特典のほか、『野球殿堂 2012』を進呈します。(ジュニア会員を除く)

*新ジュニア会員には上記の特典のほか、「野球体育博物館オリジナルピンバッジ」を差し上げます。



② 会員の種類と会費

年会費 (4月～翌年3月迄)

法人会員 1口 100,000円

個人会員 1口 10,000円
ジュニア会員 (小・中学生) 2,000円

*ご入会月により、個人会員の初年度年会費が割引になります。

ご入会月	4月～9月	10月～12月	1月～3月
維持会費 (個人会員)	10,000円	5,000円	2,000円

③ ご入会の方法

① 館内にあります「維持会員募集のご案内」の“入会申込書”に、必要事項をご記入のうえ、係りにお渡しいただくかお送りください。

「維持会員募集のご案内」は郵送もいたしますので、ご希望の方は博物館までご連絡ください。

② “入会申込書”が届き次第“維持会費のご請求書”をお送りしますので、維持会費をお振込みください。

お問い合わせ 博物館 業務部 (TEL 03-3811-3600)
皆様のご協力、よろしくお願い申し上げます。



殿堂入りの人々を語る (35)

夫との50年

青田 満子 (青田 昇氏 夫人)



2009年野球殿堂入り
青田 昇氏レリーフ

夫は1924(大正13)年11月22日に兵庫県三木の鍛冶職の8人兄弟の末っ子として生まれました。幼い頃から元気に野山を駆け回り、学力優秀・運動神経抜群で特に足が速くて運動会では後ろの人に大差をつけての入賞。また近くの神社のお祭りの子ども相撲大会では、小柄ながら本人より大きな人を次々と投げ倒し、どこの子ども相撲大会でも入賞していたそうです。大正末期から昭和初期の不況の世の中に子だくさんで、それなりに子育ての大変だった青田家にとっては家族の希望の光だったそうです。14歳で最愛の母と別れ、17歳で父と別れ、滝川中学には姉の家から通っていました。2年先輩には、豪腕ピッチャーの別所 毅彦さんもおられて、野球部の猛訓練を共に戦っていたそうです。その頃に夫は巨人軍にスカウトされ、プロ野球人生が始まりました。途中、戦争が始まり野球も敵国競技ということで出来なくなり、当時しっかり軍事教育を受けていた夫は、自分から志願して陸軍航空隊に入りました。毎日、血のにじむような苦しい訓練を受け、国のために死を覚悟で突撃命令を待っていたそうです。いよいよ命令が下り明日、突撃といった時に終戦になりました。当時の複雑な気持ちは1998(平成10)年の『ジャジャ馬一代 遺稿自伝』に書き留めております。今の野球界は整備された設備管理の中、選手の方々は屋内の美しいグラウンドで活躍されていますが、戦後まもない時代の球界は正反対で野球遠征移動は蒸気機関車、でこぼこ道のトラック移動でした。容赦なく照りつける太陽の下で真っ黒になって汗をとばし砂ぼこりの中で、それでもホームランをポンポンかっとならしていたスター選手達は、戦後まもない野球ファンの人々の心にどれだけの感動と勇気を与えていたかと痛感しています。夫は、どんなことがあっても仕事を家に持ち込むことはなく、遠征先で、めずらしく美味しかった食べ物を、食材の買い出しから全て自分で腕をふるってつくり「おいしい」という家族の顔を見るのが大好きでした。家族だけでは物足りず、兄・姉・友人・私の両親・兄妹・子ども達の友人を招いての食事会。そんな時の我が家は本当に賑やかでした。両親を早く亡くし、独りぼっちで死を覚悟の軍隊で生活を経験したことで家族との団欒、友人との交わりを、とても大切にしていました。

1984(昭和59)年、6番目の娘が少しの間、芸能界にご縁のあった頃の話ですが、表に出ることが苦手な私は仕事と家庭は別と決めていましたが娘を通して、夫に親子料理番組、旅番組などの仕事が入るようになり、表では厳しい夫の印象が少しずつ変わってきて、なぜかあるイベントで1987(昭和62)年度の「ベストファーザー賞」に選ばれてしまいました。すでに球界では、たくさんの賞をいただいていた訳ですが、この賞を子ども達は、とても喜んでおりました。夫とは16歳で戦後まもない頃、野球のことはもちろん、夫のことも何も知らなかったままの出会いで50年が過ぎ、そして悲しい別れから15年が過ぎ、私も夫よりすっかり歳を重ねてしまいました。わずか11歳で天国に召された娘と72歳で召された夫は、今も私の心の中に生き続け守ってくれていることを実感しています。優しいたくさん子ども、孫、曾孫の命の宝に出会え、孫の中には夫の夢を追って少年野球で頑張っている者もいます。また夫が殿堂入りを果たしたことで家族はもちろんのこと、夫の時代を知らない若い世代の野球ファンの人達が、昔こんな選手がいたのだと、永遠に知り継がれていくことが、今の私の安堵と幸せでございます。先日、横浜DeNAベイスターズの監督になられた中畑 清さんが、ご多忙の中夫の墓参に来て下さいました。とても嬉しいことでした。

長い間、変わることなく夫を信じ愛し続けて下さっている皆さまに日々感謝し益々の野球界の、ご発展を心より、お祈り申し上げます。



もの 知ってほしいこんな資料(78)

バットのルール変更と「最大値のバット」

2010年に大リーグの「Official Baseball Rules」において、バットの最も太い部分の直径の最大値が2 3/4インチ(7cm)から2.61インチ(6.6cm)に改められました。これを受けて、日本でも「公認野球規則2011年」から変更され、1年間の準備期間を経て、2012年シーズンより適用されています。バットのサイズに関するルールが変更されたのは実に115年振りの出来事でした。今回は、このルール変更の話と、写真の「ルール上最大値のバット」についてご紹介します。

ルールに初めてバットに関する記載が登場したのは別表の通り1857年と言われており、この時は“木製の円い棒”、“太さが直径2 1/2インチ以下”と規定されました。長さについては1869年に“42インチ(106.7cm)”と規定されて以降、現在まで変わっていません。太さについては1895年に“直径2 3/4インチ以下”と決められましたので、今回2010年の改定は115年ぶりの変更となりました。なぜ、115年も変わらなかったルールが変わったのか、それには以下のような理由があるようです。

【バットのルール変遷】

1857年	バットは木製の円い棒で太さが直径2 1/2インチ以下となる(長さは自由)	1885年	片面の一部は平面でもよい(円い棒でなくてもよい)
1868年	長さ40インチ以下となる	1893年	*円い棒でなければならない
1869年	*長さ42インチ以下となる	1895年	太さが直径2 3/4インチ以下となる
1874年	全体が木製でなければならない(木製バットの場合は現在も同じ)	2010年	*太さが直径2.61インチ以下となる *は現在と同じ

現在のプロ野球選手のバットで最も一般的な木材はメイプルです。メイプル製のバットは1998年ころから大リーグで使用され始め、2001年にシーズン本塁打記録を塗りかえたバリー・ボンズ選手が使用したこともあって一気に広まりました。ESPNのウェブサイトにも08年に掲載された、米最大手のメーカー担当者のコメントによると、同社の供給するバットの65%がメイプル製とのことです。メイプル製のバットは、表面が硬く、それまでアメリカで主流だったホワイトアッシュよりも剥がれにくく耐久性があるといわれています。しかし、密度が低く比重が軽い材を用いて作られたバットの場合、折れやすく、折れた際に破片が飛び散ることから、危険性が指摘されています。また近年、選手がスイングスピードを向上させるため、メイプルに限らず軽いバットを好む傾向があり、試合中に審判や選手、観客が折れたバットの破片によって負傷する事故が増えてきたことから、安全性を高めるための方策のひとつとして、ルールが変更されたということです。

ルールの変更は、前述の通りバットの最も太い部分の直径の最大値を2 3/4インチ(7cm)から2.61インチ(6.6cm)に細くするというものでした。“太いバット”、“細いバット”、どちらが丈夫かと問われた場合、単純に太い方ではないか…との印象があり疑問に感じていました。ですが、今年の「バット製作実演」の際、ミズノの久保田 五十一名人より比重についてのお話を伺ってようやく理解できたように思います。例えば900gのバットが2本あり、一方が太く、一方が細かったとします。この場合、同じ重さであることから細いバットのほうが、比重が重く(密度が高い)より安全だと考えられる…ということです。



写真の「ルール上最大値のバット」は、その名前の通り、長さ106.7cm、最も太い部分の直径が6.6cmで作られています。ミズノの久保田名人の製作によるもので、同社からご寄贈いただきました。通常入荷するバットの材料は長さ1m以下の角材とのことで、これ

は材料段階からの特注品です。当館の収蔵品の中で最も長いバットが藤村 富美男選手の“物干し竿バット”で92.5cm、写真の並んでいるバットはイチロー選手モデル(平均的な85cm)で、比べるといかに長いかがお分かりいただけるものと思います。この最大値のバットは、館内イベントホールの「バットのひみつ」コーナーにて展示中です。ぜひご覧ください。

学芸員 関口 貴広



コラム／博覧・博楽 (42)



75%のハードル

小林 二三男（野球体育博物館維持会員・元当館事務局長）

私は、2003（平成15）年から定年を迎えた2008（平成20）年までの5年間、（株）東京ドームからの出向で事務局長としてこの野球体育博物館に勤務しておりました。サービス業の最たる会社から博物館という文化事業への転身に当初は大変戸惑ったものでした。

野球体育博物館は1959（昭和34）年に開館し、日本野球界の発展に貢献した方を顕彰する「野球殿堂」を重要な事業の柱として特別表彰と競技者表彰を行ってまいりました。

特別表彰委員会ではプロ野球界、アマチュア野球界役員および野球学識経験者からなる14名の選考委員によって「殿堂入り」が検討され、競技者表彰委員会では新聞・ラジオ・テレビなどで野球報道に関し15年以上の経験を持つ選考委員約300名の投票によって「殿堂入り」が決定されます。

プロ・アマの各野球団体や野球報道の関係者との付き合いは、場違いな感じさえ感じられるものでした。

そのような中、特別表彰委員会の席上で選考委員であった中西 太さんと稲尾 和久さんにお会いして個人的に大変感激したのを覚えています。私は小学生の頃、西鉄ライオンズのファンで特に怪童中西と鉄腕稲尾の活躍に胸を躍らせていたからです。

さて、競技者表彰委員会の記録をひも解いてみると殿堂入りの厳しさが改めて感じられました。第1回の選考委員は120名でしたが今では300名を超えるまでになりました。それも野球に対して鋭くまた厳しい目を持った記者の方がほとんどです。そして昔も今も75%以上の得票が殿堂入りするのに必要なのです。

1960（昭和35）年から52回の選考委員会が行われましたが、今年を受賞者を入れて競技者表彰（プレーヤー表彰）は77名を数えるに過ぎず大変狭き門です。しかも現役引退後5年を経過して有資格となっても1年目で殿堂入りを果たしたのは初回のスタルヒンと王 貞治さんのわずか二人だけです。2年目で受賞したのも島岡 吉郎・広岡 達郎・稲尾 和久・山内 一弘・若松 勉さんの5名しかいないのです。ミスターは3年目でやっと殿堂入りを果たしました。打撃の神様川上 哲治さんも3年目の受賞ですが、その年1度目の投票で該当者がいないときに当時あった再投票（現在はありませぬ）というシステムで滑り込んでいます。

次に得票率を見てみると、以下のようになります。

		有効票	得票数	得票率
1	スタルヒン '60（昭和35）年	111	108	97.3%
2	三原 修 '83（昭和58）年	208	200	96.2%
3	稲尾 和久 '93（平成5）年	212	201	94.8%
4	若松 勉 '09（平成21）年	304	288	94.7%
5	王 貞治 '94（平成6）年	221	206	93.2%
	⋮			
77	大杉 勝男 '97（平成9）年	228	171	75.0%

スタルヒンの97.3%は驚異的ですが、若松 勉さんの有効票が304票と多数になって、多くの得票数が必要になる中での94.7%もすごい数字です。

また、大杉 勝男さんのジャスト75%で受賞というのは何かほっとした感じがします。

藤田 元司さんは'96（平成8）年に殿堂入りしましたが、前年の'95（平成7）年は合格ラインにわずか1票足らずに74.5%で落選になりました。また、落合 博満さんも'11（平成23）年に殿堂入りしましたが、前年、前々年と1票足らず2年とも74.6%で落選となりました。

75%でも大変な数字なのに、90%以上という非常に高い得票率はまさに驚異的です。

しかし、殿堂入りして当然と思われる上位の方においても100%ということはなく、選考委員の厳しい見方に驚かされます。

75%のハードルを越えるのは誰か？そして得票率100%は実現するのか？毎年お正月の発表を楽しみにしている次第です。



こんにちは図書室です



雑誌「運動界」と日本運動協会



今回は1920（大正9）年創刊の雑誌「運動界」をご紹介します。

「運動界」は運動界社（東京市牛込区弁天町）から出版され、創刊号の編集兼発行人は飛田 忠順（1960年殿堂入り）が務めていました。サイズは当初縦18cm×横12cmで1921（大正10）年6月号から縦21cm×横15cmとなりました。

創刊の辞には、

「普通に人が考えるよりも遙かに大きな意義が運動に与えられなければならない。…（中略）…雑誌「運動界」の任務はこの運動時代に用意しかつこれを正導するがために、わが運動界各方面の権威者を網羅して、興味深い事実報道と真面目な批判指導とを、読者のとるに任せて提供するにある。」と壮大な目標を掲げています。記事の内容も創刊の辞にあるように、野球だけでなく陸上、庭球、漕艇など様々なスポーツの記事が掲載されています。

1921（大正10）年4月号には日本初のプロ野球チームである“日本運動協会創立の趣意”が掲載されています。これによると、日本運動協会は「本邦運動界の指南車となり、羅針盤たらん事」を目的に設立されました。場所は芝浦で約6000坪の大運動場（野球場）、テニスコートがあり、浴室や娯楽室があるクラブハウスもあり、運動するだけではなく、運動を愛する人たちの親睦をはかる場所でもありました。

この日本運動協会創立の記事が掲載されている4月号から発行所の住所が、牛込区弁天町から、“芝区南濱町”の運動協会内に移ります。詳しい理由はわかりませんが、編集人飛田 忠順や、執筆している押川 清（1959年殿堂入り）、橋戸 信（1959年殿堂入り）、河野 安通志（1960年殿堂入り）、中野 武二（1972年殿堂入り）などは、日本運動協会設立時の出資者であり、社員だったことを考えると、「運動界」と日本運動協会が密接な関係だったと推測できます。



「運動界」大正10年8月号より

日本運動協会は1923（大正12）年9月1日に起きた関東大震災後、運動場が震災の救援物資置き場となり、翌年3月号の「運動界」に運動協会解散決議が掲載されます。翌月号から発行所が芝区から“牛込区下宮比町”へ移りました。その後、雑誌は1931（昭和6）年7月号まで続きます。

歴史に“たられば”はありませんが、関東大震災がなかったら、「運動界」は、日本運動協会は、どのように発展をしたのでしょうか？

「運動界」は創刊号から終刊まで揃っており、図書室で見ることが出来ます。

司書 茅根 拓



企画展 「名選手のスパイク展」

●会期 ～6月3日 ●会場 野球体育博物館 企画展示室

選手のプレーを支える「スパイク」を特集する企画展「名選手のスパイク展」を開催します。

スパイクを特集する展示は当館としては初めての試みです。

スタルヒン投手らプロ野球草創期の名選手や、福本豊選手ら歴代の盗塁王など、日米の名選手のスパイク約80点を展示し、素材やデザインなどの進化、軽量化についてもご紹介します。

また、本展では株式会社アシックスのご協力により、イチロー選手（マリナーズ）の2012年最新モデルや01、03年モデルも特別展示します。

《おもな展示資料》

スタルヒン、若林 忠志、福本 豊、衣笠 祥雄、秋山 幸二、赤星 憲広、松坂 大輔、ダルビッシュ、フィルダー、オルティス、イチロー他 各選手のスパイク約80点を展示。



博物館からのお知らせ

▶理事・評議員の交代

新任 理事 白石 興二郎氏（読売巨人軍取締役オーナー）
 評議員 四藤 慶一郎氏（阪神タイガース専務取締役）
 退任 理事 桃井 恒和氏 評議員 沼沢 正二氏

▶販売中！

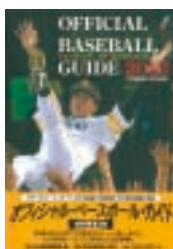
次の商品を、博物館の受付で販売しております。
 ご来館の記念にぜひお買い求め下さい。

●野球殿堂 2012 2,500円（税込）
 編集 野球体育博物館 発行所 ベースボール・マガジン社
 発行年 2012年3月15日
 全225ページ A5サイズ



1面でご紹介しました『野球殿堂 2012』です。殿堂入りされた177名の球歴がわかる1冊です。
 ※郵送ご希望の方は「野球殿堂 2012希望」と明記の上、代金（本代2,500円と送料100円）の合計2,600円を現金書留で当館までお送り下さい。

●オフィシャル・ベースボール・ガイド 2012 2,900円（税込）
 （社）日本野球機構編



1963年から毎年発行されているプロ野球公式記録集です。両リーグの全選手投・打撃成績・全投手成績、日本シリーズ・オールスターゲームの記録集、野球殿堂、イースタン・ウエスタンリーグの成績、セ・パ両リーグの記録集などプロ野球の1年の出来事がわかる一冊です。
 ※郵送ご希望の方は、「オフィシャル・ベースボール・ガイド 2012希望」と明記の上、代金（本代2,900円と送料100円の合計3,000円）を現金書留で当館までお送り下さい。

●グリーンリストバンド 500円（税込）



ファンの皆様にも温暖化防止に参加・協力していただけるよう、プロ野球選手が装着して温暖化防止をアピールするグリーンリストバンドの販売を開始しました。

※画像は販売用のデザインです。選手着用デザインとは異なります。

●平成24年野球殿堂入り記念直筆サインボール 北別府 学氏



平成24年野球殿堂入りされました北別府 学氏の直筆サインボールです。

財団法人野球体育博物館 理事長の証明書が附属、ボールケース底、証明書にはシリアル番号が入ります。

【ボール】NPB統一球 直筆サイン入り

【素材】ケース：ガラス／台座：木製

【カラー】ケース：透明／台座：ブラウン

【付属品】野球体育博物館証明書、野球殿堂2012（書籍）、野球体育博物館ご入館券6枚

【販売数】50個

【サイズ】ボールケース：縦14.5×横13×奥行13cm（奥行は台座含まず）

※なお、このボールはインターネットのみの販売になります。

NPBオフィシャルオンラインショップ（<http://shop.npb.or.jp>）のメモラビリアからお申し込み下さい。

●博物館のご案内

場 所 東京ドーム21ゲート右

開館時間 3月1日～9月30日 AM10時～PM6時
 10月1日～2月末日 AM10時～PM5時
 （入館は閉館の30分前まで）

入館料 大 人 500円（300円） } () は
 小・中学生 200円（150円） } 20名以上の団体
 65歳以上 300円

休館日 月曜日（祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館）
 年末年始（12月29日～1月1日）

《5月・6月・7月の休館日》

5月 7日・14日・21日

6月 4日・18日・25日

7月 9日

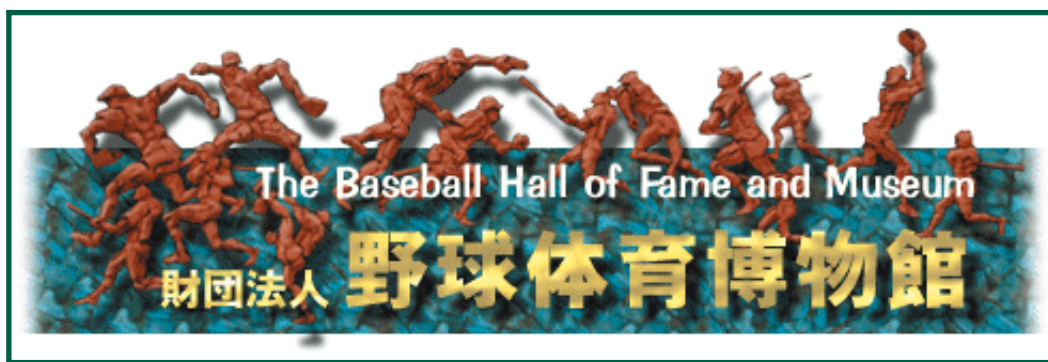
※7/10～9/2まで無休です。

●編集後記 東京ドームで3月28日、29日に大リーグの開幕戦が行われました。今、館内のエントランスホールには、イチロー選手の2012年シーズン初打席初安打のボールや、スパイク、バティンググラブなどを展示しています。見てだけで、あの熱気と歓声が甦ってきます。皆様もぜひご覧になって下さい。

Newsletter Vol.22 / No.1

2012年4月25日発行

編集・発行 財団法人 野球体育博物館
 〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61
 Tel 03 (3811) 3600 Fax 03 (3811) 5369
<http://www.baseball-museum.or.jp/>



リレー随筆 (48)

近代球場の父

競技者表彰委員 島田 健 (日本経済新聞社)

Kスタ宮城球場の両翼は101.5尺もある。横浜や北九州など古い球場を別にして、日本のプロ野球の球場もきれいにしかも大きくなった。今や、ほとんどの球場が左右両翼99尺、中堅122尺という野球規則をクリアしている。1988 (昭和63) 年完成で当時、新型大型球場といわれた東京ドームでさえ、左右中間のふくらみが少ないため、「ホームランが出やすい」といわれるほどだ。30年前とはまさに隔世の感がある。こんな状態になったのは79 (昭和54) 年から2期6年、コミッショナーを務められ95 (平成7) 年に亡くなられた下田 武三さんあってのことである。

同氏は、ルールに合った球場が一つもない当時の状態に危機感を覚え、80 (昭和55) 年から主要球場の実測をスタートさせた。手押しの距離計で測っていた記憶がある。改修には費用がかかるため、すぐに結果は発表されなかったが、後にパ・リーグの公式ガイドであるブルーブックなどに掲載された。それを見ると、セ・リーグの主要球場でさえ両翼が87尺しかないものがあつた。また、ポールが傾いている球場やマウンドの高さが規定を満たしていないものなど、ひどい状態だったようだ。こんな惨状を将来にわたって是正するべく下田さんは81 (昭和56) 年に「野球場整備に関する要望書」を全国の主要球場などに送った。

それ以後、新しい球場を作る際には担当者がコミッショナー事務局を訪ねてきて規則通り作ることを約束したようだ。神宮や西武ドームも改修の際に両翼が広げられた。筆者は下田さんを「近代球場の父」と勝手に称しているが、どうだろうか。

下田さんがコミッショナーに就任したのは、世間を騒がせた「江川事件」の後。駐米大使などを歴任した外交官だが、最高裁判事となった法曹の人でもある。世間の信頼をやや落とした球界に対して「ルール違反の事態は是正する」と次々と改善策を打ち出した。

80 (昭和55) 年に近鉄がシーズン239本塁打の記録を作るなど、飛ぶボールが話題になった。下田さんとNPBでは1.5尺上から大理石に落とした跳ね返り具合を測るという原始的な検査法から、日本車両検査協会に依頼して電子機器で測定する方法に改善。近鉄の使用球が検査の結果、性能が良すぎるということで改善を要望。翌年、近鉄の本塁打数は149まで下がった。統一球の使用で本塁打数が激減した昨季のような劇的な効果があつた。

圧縮バットの禁止も下田さんの時代。野球規則ではバットの反発力を増すような含浸加工は認められていない。折れやすくなるという業界の反発には実行委員会のバット問題小委員会で検討させ、折損防止策をパンフレットにして配布する細かい気配りで、実行に移した。

当時、はやり出したサインを出す際の乱数表もいち早く禁止処分の対象となった。試合時間があまりにも長くなったからだ。

DH制の日本シリーズ採用問題では、「両軍が試合をするには公平な条件でなければならない」というフェアプレーの精神から、セ・リーグの反対を押し切って、隔年採用の裁定をした。現在ではパの本拠地での試合で採用されているが、米大リーグのありさまから見ても今から考えてみても当然の裁定だった。

下田さんの改革の内容は著書『プロ野球回想録』(ベースボール・マガジン社) に詳しいが、NPBの財政安定のために各球団の分担金制度を始めたこと、コミッショナー事務局内の役割分担を明確にするなど、球場だけでなく、プロ野球組織の近代化に貢献したことも分かる。

この冊子をご覧になるような方にとって、以上の内容は「常識」と思われるかもしれないが、不思議なのはこれだけコミッショナーとして球界に貢献したのに、下田さんが野球殿堂入りをしていないことだ。あえて長々と書かせていただいた所以である。